

新型コロナウイルス感染予防対策への態度に影響する 要因としての恥意識に関する基礎的検討 (2)

— 仲間との不一致に起因する恥意識が感染予防行動に及ぼす正負の影響に着目して —

中村 真*

要 約

本研究は、恥意識、命令的規範、他者への同調傾向が新型コロナウイルスに対する感染予防行動にどのような影響を与えるのかを首都圏の四年制大学に在籍する学生を対象に調査を行って検討した。その結果、先行研究と同様に、命令的規範は手指消毒やマスク着用で代表される基本的な感染予防行動を広く促すことが示された。また、自らの理想や目標と現実の行動が一致しないことに起因する「自分恥」は、顕現性が低く励行の有無が本人にしか分からない感染対策である手指消毒の励行を促進する傾向があること(仮説1を支持)、自分の行動が社会一般の常識や規範と一致しないときに生じる「他人恥」は、視認性が高く他者の目にとまりやすい感染対策であるマスク着用を促進する傾向があること(仮説2を支持)が示された。さらに、自分の考えや行動が身近な仲間と一致しないときに生じる「仲間恥」は、調査対象者が準拠する仲間集団の感染予防に関する規範意識の高低によって、感染予防対策に対して促進・抑制のいずれにも影響を及ぼす可能性があることを示唆する新たな知見が得られた。

キーワード：恥意識、新型コロナウイルス感染予防対策、自分恥、他人恥、仲間恥

問題・目的

中里・松井(2007)によると、恥意識は、自らの理想や目標と現実の行動が一致しないことに起因して生じる「自分恥」、自分の行動と社会規範や常識との不一致によって生じる「他人恥」、身近な仲間と自分との間で考えや行動にズレが生じたときに感じる「仲間恥」で構成される。そして、自分恥は自らの理想や目標への志向を、他人恥は社会規範の遵守を、仲間恥は身近な友人への同調を促すという異なる心性を包含すると考えられる(中村, 2022)。

これらの心性の帰結として、自分恥と他人恥は、青少年の非行許容性や社会的逸脱行為を抑制し

(中里・松井, 2007; 中村, 2010, 2011, 2012, 2018)、向社会的行動を促進する傾向が示されている(中村, 2011, 2012)。一方、仲間恥には非行許容性や社会的逸脱行為を促進し(中村, 2010, 2011, 2012, 2018)、向社会的行動を抑制する働きがあることが示されている(中村, 2011, 2012)。また、自分恥は大学生の就学意欲に対して促進的な影響を、他人恥はやや促進的な影響を、仲間恥は抑制的な影響を与える傾向がある(中村, 2014)。さらに、自分恥は大学生の課題先延ばしに対して抑制的な影響を、他人恥はやや抑制的な影響を与える一方で、仲間恥は促進的な影響を与える傾向があることも示されている(中村, 2017)。

以上の知見を要約すると、恥意識は青少年の意識や態度に正負両面に渡って影響を与えており、その方向性は恥の種類によって異なる。総じて、

2022年11月30日受付

* 江戸川大学 人間心理学科教授 社会心理学

表1 恥意識が青少年の社会的態度に与える影響

		自分恥	他人恥	仲間恥
肯定的態度	向社会的行動	促進		抑制
	就学意欲	促進	やや促進	抑制
否定的態度	非行許容性 社会的逸脱行為	抑制		促進
	課題先延ばし傾向	抑制	やや抑制	促進

自分恥と他人恥は社会的に望ましい態度を促進し、社会的に望ましくない態度を抑制する傾向がある。対照的に、仲間恥は社会的に望ましい態度を抑制し、社会的に望ましくない態度を促進する傾向があると言える(表1)。

仲間恥が青少年を望ましくない社会的態度に向かわせる背景には、彼らのあいだに大人社会が作り出した常識や規範への反発心が共有されやすいこと(中村, 2010)、相手と深くかかわり合うことや切磋琢磨しながら互いを高め合うような友人関係を避ける傾向があること(中村, 2013; 中村・松田, 2014)、規範意識の低い仲間と同調する傾向があること(中村, 2018)などが挙げられる。

中村(2022)は、大学生を対象にウェブ調査を行い、恥意識が新型コロナウイルスの感染予防対策への態度においても正負両面にわたって影響を及ぼすのかを検討した。その結果、自分恥は手洗いや手指消毒などの感染対策を促す傾向があり、他人恥はマスク着用の遵守を促す傾向があることが示された。一方、仲間恥はマスク着用や手指消毒などを抑制する傾向があることを示唆する知見を得ている。そして、これらの結果から、恥意識が新型コロナウイルスの基本的感染予防対策への態度に与える影響について、以下に示す3つの仮説を導出した。まず、自らの理想と現実の行動が一致しないことに起因する自分恥は、理想や目標への志向を促すので、感染予防の成否に大きく影響することが認められているものの、顕現性が低く励行の有無が本人にしか分からない手洗いや手指消毒などの感染対策を促進するという点で自律的

に機能する(仮説1)。また、自分の行動が社会のルールや常識と一致しないことによって生じる他人恥は、社会規範の遵守を促すので、予防効果が世間一般に広く認められており、かつ、視認性が高く他者の目にとまりやすい感染対策であるマスク着用を促進するという点で他律的に機能する(仮説2)。一方、仲間との不一致に起因する仲間恥は、大人社会が作り出した常識や規範への反発心を共有しつつ互いを高め合うような友人関係を避ける、という最近の若者に特有の心性を背景に、規範意識の低い友人への同調を促すと思われるので、感染対策を抑制する可能性があると考えられる(仮説3)。

以上をふまえて、本研究では、恥意識に、樋口・荒井・伊藤・中村・甲斐(2021)、中谷内・尾崎・柴田・横井(2021)において感染予防行動の促進要因であることが示されている「命令的規範」および「他者への同調」を加えたうえで、これらの変数が新型コロナウイルスに対する感染予防行動にどのような影響を与えるのかを検討するとともに、上記の仮説1および仮説2の検証を行う。

なお、先に述べた通り、一連の先行研究では仲間恥が青少年の社会的態度に否定的な影響を及ぼす傾向が示されているが、仲間恥が身近な友人への同調を促すのであれば、規範意識の高い集団に準拠している青年においては、仲間恥がむしろ社会的態度に肯定的な影響を与えるのではないかと考えられる。これは仲間恥が包含する心性を検討するうえにおいて見過ごすことのできない大変重要な論点であると思われるが、従来の研究ではこの点に関する検討がほとんど行われていない。したがって、仮説3については、青年が準拠する仲間集団のメンバーが励行する感染予防行動の多寡によって、仲間恥が新型コロナウイルスに対する感染予防行動に肯定・否定の両面にわたって影響を与える可能性があることを視野に入れて探索的に再検討する。

方法

調査対象者・調査日時

首都圏の四年制大学に通う学生 445 名（男性 212 名、女性 232 名、性別無回答 1 名、平均年齢 19.83 歳、SD 1.17）を対象に Google form によるウェブ調査を実施した。調査期間は、2022 年 1 月 18 日～1 月 24 日であった。調査対象者の学年と性別の内訳は表 2 に示した通りである。

調査内容

質問紙の構成は以下の通りであった。

1. フェイス・シート

所属学部・学科、学年、年齢、性別を尋ねた。

2. 恥意識

中村 (2013) の恥意識尺度 27 項目を用いて、それぞれの場面に対する恥ずかしさの程度を尋ねた。具体的には、“自分が正しいと思ったことができなかつたとき” “親しい仲間の意見と自分の考えが一致しなかつたとき” などの各項目について、調査対象者自身にあてはまる程度を「全く恥ずかしくない (1)」「恥ずかしくない (2)」「あまり恥ずかしくない (3)」「すこし恥ずかしい (4)」「恥ずかしい (5)」「とても恥ずかしい (6)」の中から 1 つ選択してもらう 6 件法で回答を求めた。

3. 新型コロナウイルス感染予防行動の

励行頻度

新型コロナウイルスに対する基本的な感染予防行動である①手指消毒と、②マスク着用について、それぞれの励行頻度を尋ねた。具体的には、

2022 年元日から本調査の回答日までの間に“大学やスーパーなどの店舗、その他の施設を利用する際に、入り口の前に消毒液が置かれている場合は、手指を消毒してから入店（入室）した” “自宅から一歩でも外に出るときは、マスクを着用した” について、「全くしなかつた (1)」「ほとんどしなかつた (2)」「たまにやった (3)」「半分 (2 回に一度) くらいやった (4)」「たいていやつた (5)」「毎回欠かさずにやった (6)」の 6 件法で尋ねた。

4. 新型コロナウイルスの感染予防に関する 命令的規範

新型コロナウイルスの基本的な感染予防対策のうち、①手指消毒と、②マスク着用に関する命令的規範に賛同する程度を尋ねた。手指消毒については、“新型コロナウイルスの感染を防ぐには手指消毒を頻繁にすべきである” への回答を求めた。マスク着用については、“新型コロナウイルスの感染を防ぐには、自宅から一歩でも外出するたびにマスクを着用すべきである” を用いた。いずれも「全くそう思わない (1)」「そう思わない (2)」「ややそう思う (3)」「そう思う (4)」「非常にそう思う (5)」の 5 件法で尋ねた。

5. 新型コロナウイルスの感染予防行動に おける他者への同調

新型コロナウイルスの基本的な感染予防対策のうち、①手指消毒と、②マスク着用における他者への同調の程度を 5 件法で尋ねた。質問項目は、“手指の消毒をする人を目にする時、自分もした方がよいと感じますか” “街中や通勤・通学時にマスクを着用する人を目にする時、自分もつけた方がよいと感じますか” の各 1 項目であった。選

表 2 調査対象者の内訳

	1年	2年	3年	4年	計
男性	94	52	60	6	212
女性	127	50	41	14	232
性別無回答	0	0	1	0	1
計	221	102	102	20	445

択肢は、「全くそう思わない (1)」「そう思わない (2)」「ややそう思う (3)」「そう思う (4)」「非常にそう思う (5)」であった。

6. 仲間集団の新型コロナウイルス感染予防行動の励行頻度

調査参加者に身近な仲間集団のメンバーを思い浮かべてもらい、思い浮かべた仲間が新型コロナウイルスに対する基本的な感染予防行動をどの程度励行しているのかについて尋ねた。具体的には、“あなたの親しい仲間 (たち) は、大学やスーパーなどの店舗、施設の入口の前に消毒液が置かれていても、手指を消毒せずに入店 (入室) することがある” “あなたの親しい仲間 (たち) はマスクをせずに会話することがある” “あなたの親しい仲間 (たち) は、大学やスーパーなどの店舗、施設の入り口の前に体温計測器が置かれていても、検温をせずに入店 (入室) することがある” “あなたの親しい仲間 (たち) は、マスクをせずに仲間同士で過ごすことがある” “あなたの親しい仲間 (たち) は、部屋の換気をせずに仲間同士で過ごすことがある” “あなたの親しい仲間 (たち) は、ソーシャル・ディスタンスを確保せずに仲間同士で過ごすことがある (密接・密集になることがある)” の6項目について、「まったく (1)」「ほとんどない (2)」「たまにある (3)」「半分 (2回に一度) くらいある (4)」「たいていそうである (5)」「毎回そうである (6)」の6項目で尋ねた。

なお、2～6の集計・分析にあたっては、各選択肢の () 内の数値をそれが選択された場合の得点として用いた。

調査手続き

回答は強制ではなく、評価を伴わず、個人情報 は開示されないことを説明し、同意を得たうえで Google form によるウェブ調査を実施した。

結果

1. 各変数の基本統計と性差の分析

基本統計の算出に先立って、仲間集団の新型コロナウイルス感染予防行動の励行頻度を尋ねた尺度 (6項目) の信頼性分析を行った。その結果、 α 係数は .83 であり十分に高い値を示したので、以降の分析では、尺度の合計得点を項目数で除した値を算出して用いた。なお、以下に示した通り、恥意識については因子分析を行い、その結果に基づき尺度を再構成したうえで信頼性分析を行った。

① 恥意識の尺度構成と信頼性分析

まず、恥意識尺度 27 項目について重み付けのない最小二乗法による因子分析を行った。初期解における固有値は、第1因子が 6.96、第2因子が 3.57、第3因子が 2.61、第4因子が 1.11、第5因子が 1.08 であった。固有値の減衰状況から判断して3因子を抽出した。これらの因子に対してプロマックス回転を行い、各因子は因子負荷量が .40 以上の項目群によって構成されているとみなして解釈した。なお、2つ以上の因子にまたがって因子負荷量が高い項目、および、いずれの因子にも高い負荷量を示さない項目はなかった (表3)。

第1因子は、「お祝いや式典で自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき」など、自らの行動が社会規範や常識と一致しないときに感じる恥意識 10 項目で構成されており、「他人恥」とした。第2因子は、「親しい仲間 (たち) の意見と自分の考えが一致しなかったとき」など仲間との不一致に起因する恥意識 8 項目で構成されており、「仲間恥」とした。第3因子は、「自分が決めたことを守れなかったとき」など、自分の行動が自ら立てた目標や基準に合致しないときに感じる恥意識 9 項目で構成されており、「自分恥」とした。

尺度の信頼性分析を行ったところ、 α 係数は「他人恥」が .86、「仲間恥」が .87、そして「自分

表 3 恥意識の因子分析結果

項目	因子 1	因子 2	因子 3
	他人恥	仲間恥	自分恥
静かな図書館の中で大声で騒いで叱られたとき	.733	-.090	.010
電車内で聴いていた携帯音楽プレーヤーの音漏れを注意されたとき	.715	-.046	-.172
ゼミナールに遅刻をして担当教授に叱られたとき	.700	-.043	.063
お祝いや式典で自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき	.695	.015	-.087
静かな図書館の中で自分の携帯電話の着信音が鳴ってしまったとき	.676	.041	-.137
とめてはいけない場所に自転車を止めて注意されたとき	.580	.085	.169
図書館で借りた本の返却期限に遅れて注意を受けたとき	.578	.026	.152
着ている服や靴の種類が原因で高級レストランへの入店を断られたとき	.516	.054	-.102
アルバイトの開始時間に遅れてしまったとき	.430	.038	.216
空いている電車やバスに乗ったので 1.5 人分の座席を占有していたら、いつの間にか混んできて目の前に人が立ったとき	.406	-.034	.259
親しい仲間（たち）の意見と自分の考えが一致しなかったとき	-.087	.811	.020
親しい仲間（たち）がやっていることを自分だけがしないとき	-.033	.771	.033
親しい仲間（たち）と違うことをしたとき	-.045	.729	-.043
親しい仲間（たち）が持っている流行の品を自分だけが持っていなかったとき	.038	.723	-.051
親しい仲間（たち）の話題に自分だけがついていけなかったとき	-.001	.723	.072
親しい仲間（たち）と趣味や好みが合わなかったとき	-.108	.651	.041
親しい仲間（たち）から自分だけ浮いてしまったとき	.236	.583	-.015
親しい仲間（たち）ができることを自分だけができなかったとき	.211	.457	-.069
自分で決めたことを守れなかったとき	-.127	-.038	.823
自分が正しいと思ったことができなかったとき	-.063	-.068	.671
試験勉強をしようと思ったのに怠けてしまったとき	-.052	-.014	.655
困っているお年寄りを助けられないとき	.091	.030	.620
ルールやマナーを守らない人に注意をしないとき	-.181	.124	.619
約束を破ってしまったとき	.118	-.027	.614
過ちを犯したのに黙ってそれを隠しているとき	.131	-.038	.532
努力が足りなくて自分で立てた目標を達成できなかったとき	.137	-.015	.425
自分の気持ちをはっきり言えなかったとき	-.068	.067	.407
	α 係数	.86	.87
	因子間相関		
	因子 1	-	.454
	因子 2		.220

重み付けのない最小 2 乗法、プロマックス回転

表 4 各変数の基本統計および性差の分析

変数	平均(標準偏差)	平均(標準偏差)			t 値
		全体	男性	女性	
恥意識	自分恥	3.96(.87)	3.96(.95)	3.96(.79)	-.01
	他人恥	4.78(.85)	4.46(.92)	5.08(.65)	-8.16***
	仲間恥	2.79(.97)	2.75(1.08)	2.83(.86)	-.90
命令的規範	手指消毒	4.11(.92)	3.92(1.02)	4.28(.79)	-4.10***
	マスク着用	4.09(1.07)	3.89(1.16)	4.27(.96)	-3.75***
他者への同調	手指消毒	4.32(.80)	4.16(.87)	4.47(.71)	-4.15***
	マスク着用	4.56(.72)	4.37(.85)	4.72(.53)	-5.19***
感染予防行動	店舗等入店時の手指消毒	4.99(.88)	4.89(.98)	5.09(.77)	-2.37*
	外出時のマスク着用	5.73(.61)	5.60(.78)	5.84(.39)	-4.09***
仲間集団の感染予防行動(非励行)		2.86(.88)	3.03(.96)	2.72(.78)	3.79***

* $p < .05$ *** $p < .001$

表 5 各変数の相関関係

	他人恥	仲間恥	命令的規範 (手指消毒)	命令的規範 (マスク着用)	他者への同調 (手指消毒)	仲間集団の感染予防 行動(非励行)	手指消毒 (店舗等入店時)	マスク着用 (外出時)
自分恥	.43***	.21***	.08 ⁺	.07	.03	-.11 [*]	.15**	.05
他人恥		.30***	.18***	.19***	.25***	-.13**	.09 ⁺	.19***
仲間恥			.13**	.11 [*]	.09 [*]	.05	-.02	.05
命令的規範 (手指消毒)				.31***	.53***	-.09 ⁺	.37***	.21***
命令的規範 (マスク着用)					.41***	-.11 [*]	.18***	.43***
他者への同調 (手指消毒)						-.10 [*]	.35***	.30***
仲間集団の感染予防 行動(非励行)							-.17***	-.20***
手指消毒 (店舗等入店時)								.18***

⁺p<.10, ^{*}p<.05, ^{**}p<.01, ^{***}p<.001

恥」が.83であった。いずれも高い値を示したので一元性があるとみなし、因子ごとに合計得点を項目数で除した値を算出して以降の分析に用いた。

②各変数の基本統計と性差の分析

各変数の平均値と標準偏差を調査対象者全体および男女別に算出し、表4に示した。恥意識の平均値は、他人恥、自分恥、仲間恥の順に高かった。性別を独立変数とする対応のないt検定を行った結果、「自分恥」($t(410.58) = -.01, n.s.$)および「仲間恥」($t(401.51) = -.90, n.s.$)に性差はみられなかったが、「他人恥」($t(375.44) = -8.16, p<.001$)に有意差があり、男子学生よりも女子学生のほうが高いことが示された。

また、「手指消毒に関する命令的規範」($t(397.90) = -4.10, p<.001$)、「マスク着用に関する命令的規範」($t(410.82) = -3.75, p<.001$)、「手指消毒に関する他者への同調」($t(410.30) = -4.15, p<.001$)、「マスク着用に関する他者への同調」($t(347.21) = -5.19, p<.001$)、「手指消毒の励行頻度」($t(401.71) = -2.37, p<.05$)、「マスク着用の励行頻度」($t(303.27) = -4.09, p<.001$)は性差が有意であり、いずれも男子学生よりも女子学生のほうが高かった。さらに、「仲間集団の感染予防行動(非励行)」($t(408.01) = 3.79, p<.001$)にも有意差があり、男子学生が女子学生よりも高かった。ただし、仲間集団の感染予防行動については、非

励行の頻度を尋ねたものであるため、高得点であるほど励行頻度が少ないことを意味する。したがって、この結果は男子学生に比べて女子学生のほうが仲間集団の感染予防行動の励行頻度が高いことを示す。

なお、「マスク着用に関する他者への同調」は平均値が4.56(評定値の最高点は5点)で天井効果がみられたため、以降の分析には用いなかった。同様に、平均値が5.73で天井効果がみられた「マスク着用の励行頻度」(評定値の最高点は6点)については、6段階評定値を2値(1~5を1, 6を2)に変換して以降の分析に用いた。変換後の平均値は1.78、標準偏差は.41であった。

2. 変数間の相関分析

恥意識および各変数について相関分析を行った。その結果、「自分恥」と「店舗等入店時の手指消毒」($r = .15, p<.01$)、「他人恥」と「外出時のマスク着用」($r = .19, p<.001$)の間に有意な正の相関が示された。また、「手指消毒に関する命令的規範」と「店舗等入店時の手指消毒」($r = .37, p<.001$)、「マスク着用に関する命令的規範」と「外出時のマスク着用」($r = .43, p<.001$)、「手指消毒に関する他者への同調」と「店舗等入店時の手指消毒」($r = .35, p<.001$)の正の相関が有意であった。

一方、「仲間集団の感染予防行動(非励行)」と「店舗等入店時の手指消毒」($r = -.17, p<.001$)、

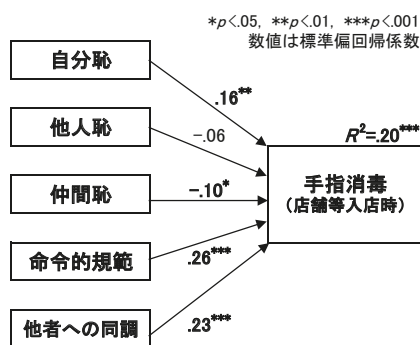


図1 手指消毒（店舗等入店時）の重回帰分析

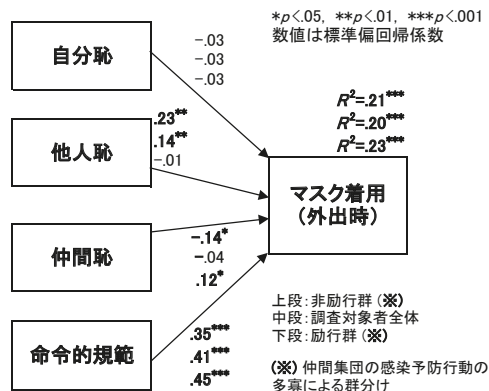


図2 マスク着用（外出時）の重回帰分析

「仲間集団の感染予防行動（非励行）」と「外出時のマスク着用」（ $r = -.20, p < .001$ ）の間に有意な負の相関が認められた（表5）。

3. 恥意識、命令的規範、他者への同調が感染予防行動の励行頻度に与える影響（重回帰分析）

①手指消毒に与える影響

まず、恥意識、命令的規範、他者への同調が基本的な感染予防行動である手指消毒の励行頻度に与える影響を検討するために、店舗等入店時の手指消毒を基準変数とし、恥意識、手指消毒に関する命令的規範、手指消毒に関する他者への同調を説明変数とする強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、 $R^2 = .20$ であり有意であった（ $F(5, 439) = 21.58, p < .001$ ）。また、自分恥（ $\beta = .16, p < .01$ ）、命令的規範（ $\beta = .26, p < .001$ ）、他者への同調（ $\beta = .23, p < .001$ ）の正の標準偏回帰係数、および、仲間恥の負の標準偏回帰係数（ $\beta = -.10, p < .05$ ）が有意であった。（図1）。

②マスク着用に与える影響

次に、恥意識、命令的規範が基本的な感染予防行動であるマスク着用の励行頻度に与える影響を検討するために、外出時のマスク着用を基準変数とし、恥意識、マスク着用に関する命令的規範を説明変数とする強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、 $R^2 = .20$ であり有意であった

（ $F(4, 440) = 27.53, p < .001$ ）。また、他人恥（ $\beta = .14, p < .01$ ）、命令的規範（ $\beta = .41, p < .001$ ）の正の標準偏回帰係数が有意であった。

さらに、仲間集団のメンバーが励行する基本的な感染予防行動の多寡によって、仲間恥がマスク着用の励行頻度にどのような影響を与えるかを検討するために、調査対象者を彼らが準拠する仲間集団における感染予防行動（6項目）の励行頻度の平均点を境に非励行群／励行群に分割したうえで、上記と同様の重回帰分析を群ごとに行った。非励行群を対象とする分析の結果、 $R^2 = .21$ であり有意であった（ $F(4, 208) = 13.57, p < .001$ ）。そして、他人恥（ $\beta = .23, p < .01$ ）、と命令的規範（ $\beta = .35, p < .001$ ）の正の標準偏回帰係数、および、仲間恥の負の標準偏回帰係数（ $\beta = -.14, p < .05$ ）が有意であった。一方、励行群を対象とする分析の結果、 $R^2 = .23$ であり有意であった（ $F(4, 227) = 16.83, p < .001$ ）。そして、命令的規範（ $\beta = .45, p < .001$ ）と仲間恥（ $\beta = .12, p < .05$ ）の正の標準偏回帰係数が有意であった（図2）。

考察

本研究では、大学生を対象とする調査を実施して、恥意識、命令的規範、他者への同調が新型コロナウイルスに対する基本的な感染予防行動にどのような影響を与えるのかを検討した。まず、基本的な感染予防行動である店舗等入店時における

手指消毒の励行頻度を基準変数とし、恥意識、命令的規範、他者への同調を説明変数とする強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、自分恥、命令的規範、他者への同調が正の影響を、仲間恥が負の影響を与えることが示された。次に、外出時のマスク着用の励行頻度を基準変数とし、恥意識、命令的規範を説明変数とする同様の重回帰分析を行った結果、他人恥と命令的規範は正の影響を与えることが示されたが、仲間恥は正負いずれにも有意な影響を与えないことが示された。

これらの結果は、総じて、樋口他 (2021)、中谷内・尾崎・柴田・横井 (2021) の知見と同様に、命令的規範は手指消毒やマスク着用に代表される新型コロナウイルスに対する基本的な感染予防行動を広く促すことを示すものである。また、自らの理想と現実の行動が一致しないことに起因する自分恥は、理想や目標への志向を促すという心性を包含すると思われるので、感染予防の成否に大きく影響することが認められているものの、顕現性が低く励行の有無が本人にしか分からない感染対策である手指消毒を促進するという点で自律的に機能していると考えられる (仮説1を支持)。

そして、自分の行動が社会のルールや常識と一致しないことによって生じる他人恥は、社会規範の遵守を促すという心性を包含すると思われるので、予防効果が世間一般に広く認められており、かつ、視認性が高く他者の目にとまりやすい感染対策であるマスク着用の励行を促進するという点で他律的に機能していると考えられる (仮説2を支持)。

さらに、自分と仲間との不一致に起因する仲間恥は、大人社会が作り出した常識や規範への反発心を共有しつつ互いを高め合うような友人関係を避ける、という最近の若者に特有の心性を背景に、規範意識の低い友人への同調を促すと思われるので基本的な感染対策の励行を抑制する可能性があるが、手指消毒についてのみこれを支持する結果が得られた。したがって、仮説3は一部で支持されたと言える。

次に、仮説3が支持されなかった点、すなわ

ち、仲間恥が外出時のマスク着用に対して正負いずれの影響も与えなかったことに着目して、本研究の調査対象者が準拠する仲間集団のメンバーが励行する感染予防行動の多寡によって、仲間恥が新型コロナウイルスに対する感染予防行動に促進・抑制の両面にわたって影響を与えるかどうかを検討するために追加の重回帰分析を行った。その結果、仲間恥は、準拠する仲間集団における感染予防行動の励行頻度が低い群 (非励行群) では外出時のマスク着用に有意な負の影響を与えるが、準拠する仲間集団における感染予防行動の励行頻度が高い群 (励行群) では外出時のマスク着用に有意な正の影響を与えることが示された。したがって、自分と仲間との不一致に起因する仲間恥は、身近な友人への同調を促すという心性を背景に、感染予防に関する規範意識が高いメンバーから成る仲間集団に準拠している場合はマスク着用の励行を促進し、規範意識が低いメンバーで構成される仲間集団に準拠している場合はマスク着用の励行を抑制する可能性があることを示唆する知見が得られたと言える。

以上をふまえると、身近な友人との不一致に起因して生じる仲間恥は、準拠する仲間集団の規範性の高低によって、感染症予防対策への態度のみならず、青少年のさまざまな社会的態度に対して促進・抑制のいずれにも影響を及ぼす可能性があると考えられる。この点をさらに詳しく検討する必要がある。

文献

- 樋口 匡貴・荒井 弘和・伊藤 拓・中村 菜々子・甲斐裕子 2021 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間における予防行動の関連要因：東京都在住者を対象とした検討 日本公衆衛生雑誌, 68, 597-607.
- 中村 真 2010 恥意識が社会的迷惑行為および社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影響 日本パーソナリティ心理学会第19回大会発表論文集 114.
- 中村 真 2011 恥意識が向社会的行動および社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影響—仲間との不一致に起因する恥意識は向社会的行動を抑制し、社会的逸脱行為を促進するの— 日本パーソナリティ心理学会第20回大会発表論文集 116.

新型コロナウイルス感染予防対策への態度に影響する要因としての恥意識に関する基礎的検討 (2)

- 中村 真 2012 恥意識が向社会的行動および社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影響 (2) —恥意識の種類でみた対象者のタイプと向社会的行動および社会的逸脱行為との関連— 日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集 380.
- 中村 真 2013 恥意識尺度の信頼性・妥当性の検討 日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会発表論文集 151.
- 中村 真 2014 恥意識が大学生の就学意欲に及ぼす影響 —仲間との不一致に起因する恥意識は就学意欲を抑制するのか— 日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会発表論文集 88.
- 中村 真・松田英子 2014 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 —帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能— 江戸川大学紀要 第 24 号 13-19.
- 中村 真 2017 恥意識が大学生の先延ばしに及ぼす影響 —仲間との不一致に起因する恥意識は先延ばしを促進するのか— 日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会発表論文集 90.
- 中村 真 2018 社会的逸脱行為の促進・抑制要因としての恥意識に関する基礎的検討 江戸川大学紀要 第 28 号 277-283.
- 中村 真 2022 新型コロナウイルス感染予防対策への態度に影響する要因としての恥意識に関する基礎的検討 江戸川大学紀要 第 32 号 119-127.
- 中里至正・松井 洋 2007 心のブレーキとしての恥意識 —問題の多い日本の若者たち— プレーン出版
- 中谷内 一也・尾崎 拓・柴田 侑秀・横井 良典 2021 新型コロナウイルス拡大期における手洗い行動の規定因 心理学研究, 92, 327-331.